

# 『「社共合同の時代」―戦後革命運動史再考―』

北原かな子

本書は東北史の泰斗で、数々の業績を上げて来られた河西英通氏による著作である。東北地域の近代を鋭く考察されてきた河西氏による最新の研究成果がこの世に送り出されたことに、心からお祝い申し上げたい。

この中では、「社共合同」がどのように起こり、そしてどう展開したのか、国際的な背景も視野に入れて幅広く論じられている。なにより本書を魅力的にしているのは、社共合同を論じるその舞台が東北地域であり、青森発祥として語られていくことであろう。本書の中心である大沢久明、津川武一の両名は共に津軽の政治社会に貢献した人物である。特に津川武一は政治の分野のみならず津軽の医療にも大きな功績を残し、その事業はいまだに人々の生活に影響を持つ。こうした、津軽地方の人たちにはとても馴染みのある政治家たちが日本の政治動向に与えた影響を見るといってもたいへん興味深い好著である。

内容は序章から終章まで計十六章から構成されている。五六六頁にもわたる大著ではあるが、しかし明確な構成であることから全体像が把握しやすいのもこの本の特徴かと思われる。構成は次のようになっている。

序章 社共合同とは何か

第一部 社共合同の形成と展開

第一章 人民戦線の模索

第二章 救国民主連盟と共産党

第三章 民主戦線から社共合同へ

第四章 社共合同路線の成立

第五章 社共合同の展開

第二部 社共合同の地域的構築

第六章 青森県社共合同前夜

第七章 青森県社共合同の誕生

第八章 青森県社共合同の拡大

第九章 青森県社共合同の行方

第一〇章 青森県社共合同の思想

第三部 社共合同の彼方

第十一章 社共合同の全国的展開

第十二章 社共合同の東北的展開

第十三章 コミンフォルムと党分裂

第十四章 六全協とスターリン批判

終章 戦後日本と地域社会の中の社共合同

序章では、人民民主主義と社共合同について、国内共産党や社会党のみならず当時の国際的背景も視野に入れた詳細な検討がなされ、先行する事例研究の整理が行われている。

第一部では人民戦線の系譜を踏まえた社共合同への転回、社共合同が成立していく経緯と一九四九年の総選挙における共産党躍進、そして総選挙以降から五〇年初頭のコミンフォルム批判までが語られる。

第二部では、社共合同の発祥となった青森の地における敗戦後の状況を踏まえ、四八年一二月に共産党青森県委員会と日本社会党青森県支部連合による社共合同が開始された過程、翌年の総選挙までの推移を踏まえて、総選挙以後の青森県政治状況が論じられる。ここで重みを持つのは青森県における社共合同の立役者だった大沢久明と津川武一の思想および行動の分析である。

第三部では、社共合同の全国的展開として、長野県、香川県、北海道、青年戦線における社共合同の状況と東北各県の動向について述べられている。極東コミンフォルム構想を通し社共合同の国際的背景を分析し、共産党分裂後の状況と大沢によるスターリン批判が検討されている。

最後に、終章では大沢と津川の政治活動の総括および各章の考察から、戦後日本の社会と地域における社共合同を論じている。

以上の構成から分かるように、本書では、これまで研究蓄積が少なかった「社共合同」の運動の実相が多方面から詳細に検討され、いわば埋もれていた社会活動の再発掘である。それにより、日本の社共合同が「東欧の社会政治情勢の影響を受けた共産党による社会党員包摂に過ぎず、五〇年代には霧消した」とみなされていたことがきわめて一面的であったと理解できる。またこの運動に参加した人々についての生き生きとした語り口により、ひとときの歴史現象の中に生きた人々の姿が浮かんでくることも魅力の一つとなっている。

さらにより重要なのは、本書の根底に地域史と全体史の構造を再検討する視点があることであろう。河西氏は全国的展開を見た社共合同を分析する中核に「地域」を据え、地域へのまなざし、地域からのまなざし

から地域史が拠点となり得たことを詳らかにしている。それにより、ともすると中央一極集中に偏りがちな政治史が実は多極構造であったことを確認することで、ナショナルヒストリーの多元性や重層性をあらためて認識させている。

さて、この大著を紹介する任を受けた筆者は、もともとこの時代の政治史を語るほどの知見をもたない。ただ河西氏とともに所属した青森県史編さん近現代部会の中で、氏の指導を受けながら青森県史の編纂に従事してきた。そうした背景もあり、本書でもっとも魅力的に感じられたのは、やはり青森県を主体とした第二部であり、そこに展開した人物模様である。

伊藤律やキリスト者としても著名だった賀川豊彦など、幾多の指導者たちが青森を訪れ、密な関係を築いていたことを背景とし、大沢久明が社会党と袂を割って共産党に入党することで、社共合同が成立していく過程が詳細に語られる。メディアの報道を掘り起こし、再構成することにより、資料によって戦後の青森に生きた人々の決意、迷い、を語らせる手法は、政治史でありながら、それ以上に個々の人間の息吹を今に伝える。また大沢や、大沢とともに戦った津川武一の生き方をまとめた部分も興味深い。特に共産党を抜けた後の津川が政治か医療か文学か、で苦悩するくだりなどは、多方面から郷土に尽くしたその偉大な業績をあらためて認識させるとともに、今なお津軽に大きな足跡を残す人物の等身大の姿を読者の前に浮かび上がらせる。そしてこうして検討してきた最後として語られる終章の「社共合同とは何だったのか」。青森という

地域の持つ周縁性、封建制にたいする津川や大沢の言葉を振り返りつつ河西氏が結論として描いた部分は圧巻であり、この時代の政治史が中央一極集中ではなく、地方ならではの様々な様相をもっていたことも論じられている。ぜひご一読をおすすめしたい。

紹介の最後として、きわめて個人的な感想を書いてみたい。

二〇一九年の師走のある日、墓参のためにばる広島から弘前においてにられた河西氏を、津川武一の眠る菩提寺にご案内した。小雨降る中で花を手向け、ろうそくの灯をともし、お線香の煙がたゆたう中で、津川武一の墓前に手を合わせる河西氏の姿は、歴史が人のつながりの中に存在することをあらためて教えてくれているように思えた。印象的な光景だった。

歴史という大きな流れの中で、ともすると見失いがちな個々の人間存在。歴史の記憶に残ることもあれば、消えることもある。消えてまた、再び見出されることもある。しかし後世にどのような解釈がなされようと、その人というものが存在したこと、何かを成したこと、そのこと自体は消しうるものではない。歴史家の仕事とは、その時その時の社会の関心により、こうした存在に光を当て、そして時にその多面性を浮き彫りにしていく、というものなのかもしれない。まさに「現在と過去との対話」そのものなのだろう。

河西氏は、おそらく深い共感を覚えながら大沢や津川の言葉の中にある「周縁性」に着目し、彼らの思いに寄り添いながらその言説を読み解き、そして彼らの社共合同とはつまるところ、戦後社会の周縁地域にお

いて急がれた民主化戦略であるとした。「周辺」「周縁」はたしかに東北につきまとう言葉であり概念である。しかし、東北とは、本当にそれだけだったのだろうか。東北に生きる、あるいは東北から何かを発信していくことは周辺、周縁からの脱却という、ある意味予定調和的な路線、かなかったのだろうか。逆にいうなら、東北以外ではこうした周縁意識、周辺からの脱却はあったのか、なかったのか、どちらなのだろうか。こうしたかすかな「問い」も残ったことを最後に記して、筆をおきたい。

(A5版、五六六頁、(株)同時代社、二〇一九年三月二十日発行、本体価格五八〇〇円+税)

(きたはら・かなこ 青森中央学院大学看護学部教授)